



去る2月8日、ソマリア沖・アデン湾での派遣海賊対処行動に従事していた第31次水上部隊のヘリコプター隊・隊長山根2海佐以下8名の搭乗員が、半年間の任務を終えて無事帰隊しました。隊員・家族及び館山市自衛隊協力会会長ほか大勢の来賓が出迎える中、日焼した隊員の表情には任務完遂への達成感と安堵感が満ち溢れていました。

<注> 写真は海上自衛隊オフィシャルサイトから転載

支部の活動概要

《2・3月活動実績》

- 2. 8(金) 派遣海賊対処行動飛行隊帰国出迎え
- 3. 4(月) 県隊友会後期理事・支部長会議(千葉市内)
- 3.21(木) 館山市戦没者合同慰霊祭(鶴谷八幡宮)

《4・5月活動予定》

- 4. 6(土) 千葉県護国神社春季例大祭清掃奉仕(千葉市内)
- 4.17(土) 千葉県隊友会通常総会(千葉市内)
- 5..11(土) 支部総会行事(館山市内)
- 5.25(土) 支部5月役員会(コミセン)

支部総会等行事のご案内

2019. 5. 11(土)

恒例の館空会・隊友会館山支部合同の総会等行事を迎える時節になりました。年1回、多くの会員が一堂に会して相互に健康や動静を確認し合い、さらなる交流を深め合うための好機であります。特に新しく入会された方々にとって、第二の人生(社会)での新たな出会いとともに、かつて自衛隊で”釜の飯を共にした”皆さんとの旧交を温める上で貴重な機会になることと思います。一人でも多くの皆さんの積極的な参加をお待ちしております。 <支部長>

期 日:2019年5月11日(土) 15:30~20:15

場 所:市内「芳喜楼」 館山市山本195-1

Tel.0470-23-7211

行 事:右コラム「行事細部時程表」のとおり。

懇親会には第21航空群司令、各隊司令、各隊隊員代表の参加が予定されております。

会 費:懇親会 男性6,000円 女性3,000円

送 迎:送迎バス(別途、参加者に連絡)

出 欠:4月15日(月)までに投函して下さい。

なお、館空会に所属する会員は、館空会からの案内に基づいて返信して下さい。

<行事細部時程表>

15:10~ 受付開始
15:30~16:10 館空会総会
16:20~17:00 館山支部総会
17:10~18:10 部外講師講話※

<講師 丸渟一氏プロフィール>

アスカグループ名誉会長
元アスカグループ代表
主な著書(2015.2 知道出版)
尖閣諸島と集団的自衛権を考える
「誰がこの国を守るのか」

新入会員紹介

3月期 田上 啓介会員(海、21空群司令部) 即日入会
永年の海自での勤務を全うされ、隊友会館山支部への入会を歓迎致します。

「再び硫黄島を訪れて」 硫黄島遺骨収集帰還事業参加レポート(その2)

今年1月29日から2月14日の間、日本遺族会の一員として昨年に引き続き硫黄島遺骨収集帰還事業に参加した正木敏順会員に、現地での収集作業や硫黄島の現況など聞かせてもらいましたので、概要(骨子)を紹介することにします。

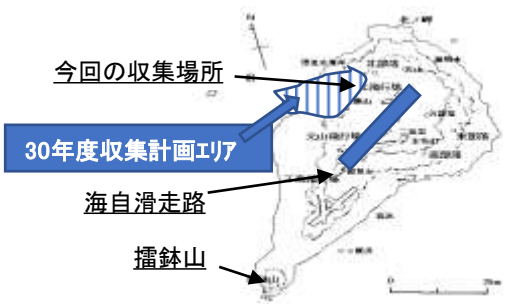
「遺骨収集帰還事業」に関連して

今回は30年度計画の第4回目(最終回、第2回は硫黄島近海の海底噴火とかで中止)に当たり、出発前日、入間で行われた結団式で計37名(うち女性4名)の収集団が編成されました。国(政府・厚労省)の事業として行われる遺骨収集帰還事業は、日本戦没者遺骨収集推進協会が音頭をとり、各種団体等に協力を呼びかけて収集事業団を編成しているもので、従来、旧軍関係者が推進役を務めてきましたが、最近ではこの分野での自衛隊出身者の活躍が目立つようになりました。二度の収集事業を通じて面識のできた海自OBのT氏は、硫黄島の状況に精通していることが買われ、天皇ご夫妻の硫黄島ご巡拝の説明役に抜擢されたということでその一人と言えましょう。今回異色だったのは、JYMA日本青年遺骨収集団・国際ボランティア学生協会の参加メンバーの中に、女子を含む2名の学生が見られたことで、他の参加者とも打ち解け、はつらつと作業に打ち込む姿に好感が持たれました。何よりも、戦争を知らない世代が、物見遊山の気持ちからではなく、真摯に奉仕作業に加わってくれることに大変頼もしさ、心強さを感じました。

今回の収集場所 は、30年度計画の北西部の海岸(砂浜)で、かつて上陸した米海兵隊が、どこから発射されるのか分からない日本軍の大口径迫撃砲や噴進砲(新型ロケット)弾の集中砲火を浴びて砂浜に釘付けにされ、前進を阻まれた場所の一つのこと。

作業は、ショベルカー(厚労省の委託業者)による開削(4~5mの深さ)の傍ら、我々収集団の手掘り作業が並行して進められ、不発弾や有毒ガスの危険性も否定できない環境ですが、ご遺骨の収集ということで常に細かい神経を配ったことは言うまでもありません。

また、米軍の資料から存在が判明したという地下壕の開削も計画されておりましたが、部隊の「行災命」の発動により今回は中止されました。島内巡拝 日程の中で行われた島内の地下壕や激戦地跡巡りでは、岩盤をくり抜いて築かれた守備隊司令部壕や駆逐艦の主砲を外して据え付けられた海岸砲の錆び付いた砲身、また島内各所の激戦地跡に建てられた「独立迫撃砲中隊」や「噴進砲中隊」、また米軍がマイクで投降を呼びかけたと言われる馬術メダリスト・戦車大隊長西中佐の碑に、極限状況下での激戦の状況が ほうふつとして甦ってくるようでした。



天山慰霊碑での追悼式 参加各団体、工事関係者、硫黄島住民の会に加え在島自衛隊海空各隊司令及び隊員代表等、60名以上が参列するなか厳粛に執り行われ、平成30年度に収集された42柱の英霊に哀悼の誠が捧げられました。

「遺骨の鑑定」講習 厚労省の斡旋で派遣された女性講師(考古人類学?)による「遺骨の鑑定」講習では、遺骨の識別・判別(人種、年齢、経過年数等)、取扱・保存方法について、収集現場でご遺骨を前にして懇切な説明があり、改めて遺骨収集帰還事業の重みを感じました。

二度に及ぶ収集帰還事業への参加を通じて、この分野に携わる知名の人々とお近づきになった関係もあり、今後 武道館で行われる全国戦没者追悼式(終戦の日)や千鳥ヶ淵戦没者墓苑拝礼式(5月)などに、総理大臣や関係先から案内状をいただくことになり光栄に存じて

「硫黄島の戦い」に至る長く凄惨な道程

「ああ渺(びょう)なるかな硫黄島 太平にわかに荒れて怒濤(う)つ 弾丸飛来す数万(なん) 山覆り地は裂け島形変わる 一巻の令書(れいしょ)苦衷(くそう)を訴(こ)う 飲むに水なく食するに糧(りやう)なし 天を仰いで母を呼び 伏しては妻を呼ぶ 万歳(ばんざい)三唱(さんしょう)して 全員摧(くだ)く」

【語句の解説】「渺なる」本土から遠く離れた 「一巻の令書」戦後、洞窟陣地で発見された守備隊の記録文書の一片で戦闘の悲壮な状況が記されている 「摧く」戦死・散華する 戦後、吟詠家・渡邊剛彰(東大卒の弁護士)が詠んだ抒情詩「嗚呼(ああ)硫黄島」の一節で、硫黄島の戦いがいかに熾烈を極めたものであったかが伝わってくるようである。もう一度口ずさんでみてはいかがですか。

「硫黄島の戦い」と言うと、米軍が上陸して日本軍の組織的な抵抗が終わるまでの約40日間の激戦として、2万余の日本軍将兵の玉砕とともにそれを上回る米軍の戦死傷者を数えるなど、米軍の戦闘史上例を見ない激戦として、戦記やドラマ等で紹介されているところである。しかしながら、この小さな島でなぜこのような筆舌に尽くし難い悲惨極まる戦闘が行われなければならなかったのか、そこに至る経緯についてはあまり知られていない。残された少ない記録からその道のりを辿ってみることにする。

米軍の硫黄島上陸に至る道程

昭和19年7月、日本が最後の絶対国防圏として膨大な兵力を投入して防御に努めてきたサイパン(マリアナ諸島)が米軍の手に落ち、日本本土攻略への突破口が開かれた。サイパンと日本(東京)の間地点にある硫黄島(当時、「いおうじま」と呼ばれた)は、米軍にとってB-29戦略爆撃機による本土攻略の中継基地として、日本軍にとっては本土への侵攻を阻止する上で”絶対に”手放すことのできない 戦略戦術上の重要な拠点であった。

サイパン失陥以降、陸軍は硫黄島に通常の3倍以上の部隊を配備して防備の強化に全力を挙げ、周囲わずか20キロ、草木もまばらで起伏の少ない島の各所に全長20km近い地下壕を張りめぐらして米軍の上陸に備えた。一方で海軍は、改編された基地航空隊の前進基地として3本の応急滑走路の建設や航空廠硫黄島分工場の増勢など基地機能の強化に全力を注いだ。

このような状況下、硫黄島に対する米軍の空襲(主としてB-24爆撃機)が次第に激しさを増し、硫黄島を前進基地とする海軍の基地航空部